

Title	「嘉味田家文書」より婚礼関係史料 - 解題および翻刻
Author(s)	漢那, 敬子; 石原, 清香; 小野, まさ子; 田口, 恵
Citation	史料編集室紀要(34): 105-121
Issue Date	2011-02-25
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/7801
Rights	沖縄県教育委員会

〔史料紹介〕 「嘉味田家文書」より婚礼関係史料― 解題および翻刻

漢那敬子・石原清香・小野まさ子・田口恵

「嘉味田家文書」は、尚真王の四男尚龍徳を祖とする首里士族の家に伝わっていた史料で、花城清順・京子夫妻によつて保管されていたのを、一九七九年に史料編集所が複製したものである。同文書については、当時、高良倉吉氏（現琉球大学教授）が「史料調査報告」として『沖繩史料編集所紀要』第五号（沖繩県沖繩史料編集所、一九八〇年）に調査の概要をまとめている。それによれば「嘉味田家文書」は以下の八点からなる。

- ① 「向姓系図家譜正統」
- ② 「向姓家譜仕次文書」
- ③ 「向姓家譜」
- ④ 「嘉味田親方給人帳」（明治十一―一八七八年）
- ⑤ 「尚敬様御安骨并御移骨日記写」（乾隆二十四―一七五九年）
- ⑥ 「毎年玉御殿御清明之時図并事寄」（同治十―一八七一年）
- ⑦ 「譜久山朝相御婚礼之時日記」（大正五―一九一六年）
- ⑧ 「辰三月十六日娘婚礼之時烈并駕取持之次第」である。

このうち、④「嘉味田親方給人帳」は同じく高良氏が『沖繩史料編集所紀要』第五号で翻刻紹介している。

今回翻刻紹介する史料は「嘉味田家文書」の⑦⑧である。⑦の〔史料1〕「譜久山朝相御婚礼之時日記」は全文三〇丁、大正五年（一九一六）七月二十七日（旧六月二十八日）、譜久山家作成の文書である。前記高良報告によれば、譜久山家は嘉味田家の親類に当たるといふ。

⑧の〔史料2〕は五丁、表紙はなく、表題に「辰三月十六日娘婚礼之時烈并駕取持之次第」とある。この辰年が何年にあたるのか、〔史料1〕の直近だとするとまさに大正五年なのだが、史料中に里之子、八巻などの語がみえることから、明治以前かと考えられる。とすると明治三十七年（一九〇四）、同二十五年（一八九二）の辰年より前の光緒六年（一八八〇―明治十三）、同治七年（一八六八―明治元）あたりであろうか。

ところで、向氏嘉味田家であるが、家譜などによれば、六世向兆鳳・小波津按司は妻に尚貞王長女松堂翁主をめぐり、七世向楨・喜屋武里之子親雲上朝喜は尚氏金武王子朝祐の四女をめぐるとなるなど、王家に近い。その長男向璋は譜久山親方朝見の五

女をめとっている。十世向弘業・喜屋武按司朝昌は若くして父の後を継いで喜屋武間切総地頭職となり、ついで国学奉行となるものの二十三歳で没している。その嗣子である十一世向椿は、道光八年（一八二八）に真和志間切真嘉比地頭職に任じられ、嘉味田と称するようになる（『那覇市史 資料篇第一巻七 家譜資料（三）』那覇市企画部市史編集室、一九八二年）。ここから、「嘉味田殿内」と称されるようになった。なお、明治六年（一八七三）の「琉球藩臣家録記」（『沖縄県史 第14巻 資料編4』琉球政府、一九六五）では「嘉味田親方 家録 八十石 物成 二十六石余／領地 真和志間切真嘉比村作得八石余」と記されている。後述するが、「史料1」に出てくる「大宜見御殿」だろうと思われるのは「大宜見按司 家録 八十石 物成 二十六石余／領地 大宜味間切作得三十石余」である。

さて、「史料1」「譜久山朝相御婚礼之時日記」は嘉味田家の親類で、同じく首里の上級士族である譜久山朝相が大宜見御殿の娘をめとる際の儀礼・行列・御祝いの膳部などについて記したものである。

婚礼は大正五年（一九一六）七月二十七日に行われているが、その前に日を選び、婚礼の日時や儀式次第、行列人数などを細かく記した「備帳（スネー帳）」を、礼服を着用した「二才」を使い仕立てて大宜見御殿へ届ける。「史料1」では次に行列の順序と膳部、行列人数が記される。行列は三回行われる。

「酒盛之時」「嫁迎之時」「嫁入之時」である。

「酒盛」は婚約成立祝いともされるが、ここでは結婚式当日の午前九時に行われているから、結婚式に先立ち、婿方から嫁方への挨拶の儀式であろう。「酒盛」には酒盛の使者である「媒」と「さたりあむしたれ」が赴くという。

なお、行列順序について、五丁から六丁にかけて乱丁ではないかと思われる。史料通りだと「酒盛之時」に「さたりあむしたれ」が二人いることになり、「嫁迎之時」にはいないことになる。五丁の表・裏、六丁の表・裏がそれぞれ逆になっているとみてただしたが、それだと「酒盛之時」に「草履取」がいて「嫁迎之時」にはいないことになるので、乱丁だけでなく、どこか落丁があるのかも知れない。「さたりあむしたれ」は「酒盛之時」「嫁迎之時」、さらに「嫁入之時」にも行列に加わるので、とりあえずは図のようにただした。

この史料から、嫁入り行列は、婿方の譜久山殿内・嫁方の大宜見御殿から同じように提灯持ちや「さたりあむしたれ」「あかま」が出ており、行列人数が同数で整えられていることがわかる。これも古式にのっとっているのであろう。

祝いの膳は仲立ちをする「媒」と結婚式の「拵引人」（根引人、ニービチンチュ）、先導役の「さたりあむしたれ」、さらに雑用係というべき「あかま」や提灯持ちにまで振る舞われる。

「さたりあむしたれ（サダイアンシタリ／サダイアンシタレー）」は、上流階級の結婚式の時、行列を先導し、新婦につき添って世話する平民の女性のこと、いわば介添人である。首里ではサダイアンシタリ、那覇ではミサレーパーパーという。

「あかま」はやはり平民で御殿ゴテンや殿内トウジにとめる女性である。年輩者が「大あかま」、年若いのが「小あかま」である。

続いて当日午前中に「酒盛」が行われる。前もって嫁方の大目見御殿へ通知した上で、婿方の譜久山殿内から礼装して泡酒二双などを抱えた「媒」と「さたりあむしたれ」がうかがう。出立に際しては当主が趣旨を申し述べ、行列帳の通り大目見御殿へ向けて出立する。その時に持参する御祝いの酒は黄色と赤染めの百田紙で口取りをし黄色の風呂敷で包み、その上からさらに覆いをかけて持つ。「酒盛」の行列が到着すると、まず嫁方の家の当主に挨拶をし、嫁方からはたばこ・お茶などが供される。このとき、お茶が「御内原より出ル」とあるが、ここで「御内原(ウーチバル)」は、御殿家の夫人の居間のことをさすらしいので、当主夫人からお茶が振る舞われるということである。

夕方六時頃、婿方から駕籠をもって嫁を迎える「嫁迎え」が行われる。出立に際しては花婿である朝相も含めた一同が霊前に焼香し、盃を交わして行列を組んで出かける。門の両側に松明を灯し、「酒盛」の時同様に「泡酒」を包み、「目録」を持参する。「御嫁迎之時次第」はその式次第を目録の図入りで記してある。

続いて婚礼儀式のメインイベントである嫁入りがなされる。「御嫁入之時次第」には、花嫁が大目見御殿を出るまでの手順、その時の祝い盆の図が記される。譜久山殿内に到着すると、駕籠にのった花嫁は「あかま」に手を取られて座敷に座し、婿の

朝相が並んで座る。婚礼の時刻は午前一時である。嫁が持参した祝いの酒は翌日使用するためひとまず「大庫理」(座敷)へ置かれる。並んで座った花嫁・花婿は歳直(としなおり)の女性たちのお酌を受け、盆のものを三箸ずついたたく。見里朝慶の「人間一生の行事」(『沖縄文化叢論』法政大学出版局、一九七〇年)によると、このとき歳直の女性たちが白朝と黒朝とを合わせて二人の肩にかけるという。「史料1」では見え消しになっているが、「御嫁持参之朝衣白朝合せ候而……」はそれをさしているのだろう。「歳直」は嫁より三歳・五歳・七歳違いの奇数歳の年齢の人をさす。また「白朝(シルチョー)」「黒朝(クルチョー)」は苧麻や絹の袍衣で、白朝はノロや神女が祭祀に着用したりするほか、首里では花嫁行列に参加する「あむしたれ」や「あかま」たちが晴着の上に重ねて着た。黒朝は同じく礼装用で王府時代は士族が着用したという(真栄平房敬「白朝」「黒朝」の項『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、一九八三年)。花嫁行列のときには、花嫁は黒いチョージン(朝衣)を頭からすっぽりとかぶり顔を隠したまま駕籠に乗ったという(『那覇市史 資料篇二巻中の7 那覇の民俗』那覇市企画部市史編集室、一九七九年)。

見里朝慶によれば、花嫁・花婿は盃を交わしたあと「水撫」を行うというが、「史料1」で盃を戻したあと水撫を上げると記されているのがそれに当たるのだろう。

「史料1」では、大目見御殿からの行列人数への饗応の次第も細かく記されている。それによると、嫁以外の行列人数はお

座敷ではなく「大庫理」へ通されて接待を受けている。「祢引人」は「媒」が相伴し、大垣見御殿の「さたりあむしたれ」以下「小あかま」は譜久山殿内側の「さたりあむしたれ」が相伴すること、菓子は土産として下され、それぞれ包んで渡していること、「祢引人」持参の酒は婿方の当主へ差し出され、当主から座敷に置いてあった酒が嫁方の「祢引人」以下「小あかま」まで振る舞われ、引き出物が下されること、提灯持ちへもまた茶菓の接待があること、などがわかる。婿方は嫁方の先導役である「さたりあむしたれ」や世話役である「あかま」にまで料理を出し、引き出物を配るのである。

婚礼の翌日もまだ儀式がある。夫婦がそろって座敷の蕙の上に座り、歳直が進み出て座敷に飾っていた盃でお酒をいただき、引き続き「水撫」を行う。その後「はづ之御飯（初のご飯）」を三箸ずついただく。それが済むと当主夫妻が着座するのを待ち、当主夫妻と花婿の朝相へ花嫁持参の酒を嫁自身がお酌し、逆に座敷飾りの酒にて当主から嫁へお酌がなされ、御霊前へ御焼香がなされる。これで結婚の儀式は終了である。

その後〔史料1〕には「御嫁初御呼之時御持参物」が記されるが、これは婚礼の数日後、婿方から嫁方への返礼として初めての里帰りに嫁に持たせた品々と行列図である。ちなみにここに「らんふ（ランプ）」という語が出てくるのも時代がうかがえる記述である。

さて、〔史料1〕が譜久山家の嫁迎えに関する記録だったのに対し、〔史料2〕「辰三月十六日娘婚礼之時烈并聳取持之次

第」は娘が結婚するときの婿取りの式次第である。前述したように、年代的にはこの史料の方が〔史料1〕より古いと思われるが、ここではとりあえず〔史料2〕とした。この「娘」はおそらく嘉味田家の娘だと思われるのだが、婚礼儀式の手順が細かく記されている。まず花婿たちが到着すると当主が玄関で迎え、書院に通す。書院に当主が着座したら一同に薄茶を差し上げ、里之子や親類が出てきてお礼を言ってお礼を言ってお礼を言ったらたばこ盆をあげ、酒や肴が出、再び当主が出てきて酒を一同や婿に振る舞う。さらに二番座にて里之子が挨拶を行い、婿が持参した酒を順々に振る舞ったあと、座敷に飾ってあった酒を当主から一同へ進める。その後、八巻をとるように亭主より挨拶があり、菓子や料理が出され、それが済むと八巻をするように里之子より挨拶がある、などと言った具合である。

〔史料2〕で記された儀式の手順が〔史料1〕からもうかがえ、首里の上級士族の家では大正期になっても王府時代の伝統・風俗を色濃くとどめていたということがわかる（実際には昭和戦前期までこうした色合いは残っていたと思われる）。婚姻・婚礼関係の古文書、それも首里・那覇のそれはきわめて少なく、わずかに『南島研究 琉球婚姻風俗号第三輯』（一九二八年七月 南島研究会発行）で「首里貴族の婚禮記録（摩文仁御殿所蔵）」として、同治十三年（明治七）の摩文仁家文書が収録されているだけである。それだけにこれらの史料は、短い記述ではあるが、士族の婚礼の様子を記したのとして貴重なものといえよう。

（漢那敬子）

〔凡例〕

文書の翻刻に際しては、以下の点に留意した。

I 基本的に漢字は新漢字を使用し、特殊な場合のみ、そのまま使用した。また、助字にあたる部分は、他の字より大きさを小さくしてある。

特殊な文字として、以下の例をあげておく。

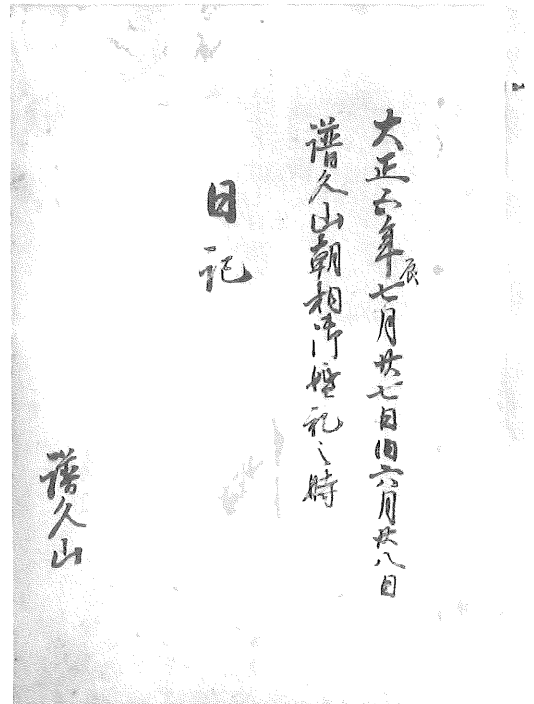
より↓る して↓ん

II 判読できない文字は□で示し、類推のできるものは行間に(―カ)で示した。また、翻刻者の責任で読点をつけた。

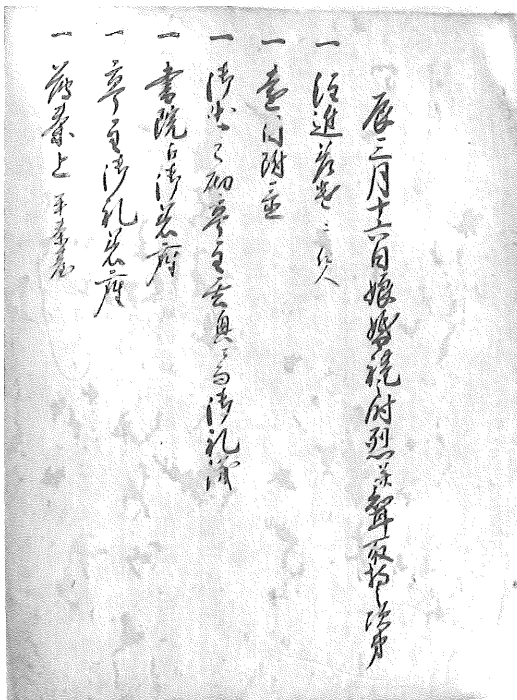
III 翻刻の様式は、行数・字数ともに、本紀要の字数にあわせて加工してあるが、原文の消しの部分は

(例) あいむ

のように棒線で示した。



〔史料1〕譜久山朝相御婚礼之時日記(表紙)



〔史料2〕辰三月十六日娘婚礼之時烈并聲取持之次第

〔史料1〕

大正五年辰七月廿七日旧六月廿八日

譜久山朝相御婚礼之時

日記

譜久山

覚

一 七月廿七日乙丑

午前九時酒盛

一 同日夜午前一時

婚礼

歳直子辰之人

水取子辰之方_レ取合

備帳

一 祝物送、同月廿六日正午十二時

右御婚礼日撰、如斯御座候、以上

辰七月一日

亀嶋有功

一 御婚礼之時、日撰書并行列膳部帳、七月廿六日被御遣候段、御奉公人御使を以大旨見御殿江被申上候事

七
七月廿六日

一 今日日撰書并行列帳（御祝物并膳部引出物を合記す）被御遣候時、

檀那御挨拶之事

附

一 日撰書者黄赤杵原式枚合せ目録折二而相調、行列帳者百田紙横折二而相調、御酒代箱二入、唐丸盆二居し、黄染風呂敷二而包ミ、美辻おそひ候也

一 御使之二才、礼服之事

婚礼之日撰書并行列・膳部帳、左之通

覚

七月廿七日

酒盛

同日夜一時

婚礼

已上

譜久山朝宜

彼ノ上書

大正五年七月廿七日譜久山朝相婚礼之時行列并膳部帳

<p>(5丁裏続き)</p> <p>嫁迎之時</p> <p>礼服色衣袖結 姚灯持</p> <p>礼服色衣袖結 姚灯持</p> <p>姚灯持 礼服色衣袖結</p>	<p>(4丁表)</p> <p>酒盛之時</p> <p>礼服色衣袖結 酒盛 包酒</p>
<p>(5丁表)</p> <p>朝衣 さたりあむしたれ</p> <p>朝衣 媒</p>	<p>(4丁裏)</p> <p>朝衣 さたりあむしたれ</p> <p>白朝 草履</p>
<p>(6丁裏)</p> <p>安駄</p> <p>色衣袖結 昇式人</p>	<p>(5丁裏)</p> <p>取</p>
<p>(6表)</p> <p>白朝包酒持并草履取 小あかま</p> <p>朝衣 大あかま</p>	

嫁入之時

(7丁裏)

色衣袖結譜久山殿内
桃灯持

朝衣譜久山殿内
さたりあむしたれ

桃灯持
色衣袖結譜久山殿内

(7丁表)

朝衣
媒
白朝譜久山殿内
小あかま

(8丁表)

白朝庫理箱持大宜見御殿
小あかま
色衣袖結大宜見御殿
桃灯持

小あかま
白朝草り取大宜見御殿
桃灯持
色衣袖結大宜見御殿

(8丁裏)

朝衣譜久山殿内
大あかま

嫁安駄
色衣袖結
昇式人

大あかま
朝衣大宜見御殿

(9丁表)

朝衣大宜見御殿
さたりあむしたれ

(9丁裏)

朝衣
祢引人
白朝草り取并包酒持
大宜見御殿
小あかま

御祝物

- 一 御酒四合宛 二双
- 媒・祢引人持参物
- 一 御酒代 五百文

引出物

- 黄赤秋原紙二枚合
- 一 錢三貫文宛
- 媒・祢引人
- 黄赤百田紙二枚合
- 一 錢貳貫文宛
- さたりあむしたれ
- 右同
- 一 同老貫文宛
- 大あかま
- 右同
- 一 同五百文宛
- 小あかま以下焼灯持迄
- 已上

膳部

媒・祢引人

菓子 千餅七枚宛

皿

- 一しほたい
- むし玉子
- 小彘ひ
- 堅田ぬり
- 白糸瓜
- にか菜
- 金かん

小皿

味噌漬瓜
漬菜

笋寒

- 黒しゝ
- 冬瓜
- 胡舛粉

汁

- 薄玉子
- 色付とうふ
- 昆布
- 牛房
- 冬瓜

赤飯

さたりあむしたれ

菓子 千餅五枚宛

皿

一しほたい
むし玉子
小糸ひ
堅田ぬり
白糸瓜
にか菜
金かん

小皿

味噌漬瓜
漬菜

筍寒

黒しゝ
冬瓜
胡舛粉

赤飯

大あかま以下焼灯持迄

菓子 千餅三枚宛

汁

薄玉子
色付とうふ
昆布
牛房
冬瓜

皿

たこ
赤氷ふと
海ぬり
白糸瓜
にか菜
青金かん

筍寒

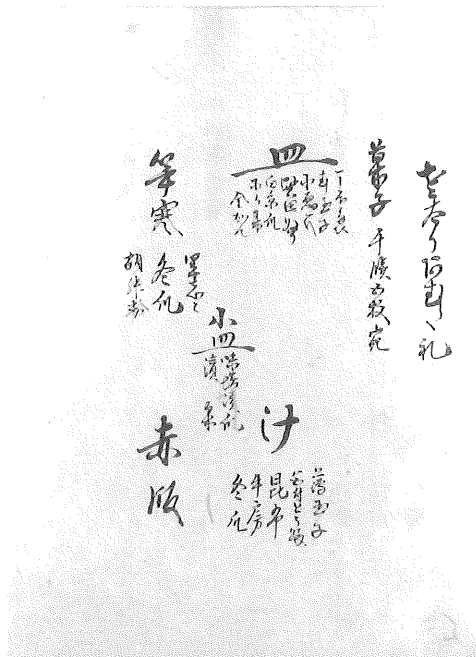
黒しゝ
冬瓜
胡舛粉

已上

汁

薄玉子
色付とうふ
昆布
牛房
冬瓜

赤飯



〔史料3〕 譜久山朝相御婚礼之時日記 (膳部の部分)

詞被聞召、濟而御座敷餽之御酒ニ而亭主方御酌被下候事

附

亭主御装束最前之通

御座敷餽之御花・御酒、兼而備置候事

切足八寸膳ニ湯耐盃四ツ居付、勝手表江備置候事

御宮仕之儀兼装束させ、さたりあむしたれ以下包酒持迄、

小あかまニ而相勤候事

御座敷餽并御花・御酒員数左之通

御籠飯 老通

鶴瓶 老双

御酒台 老通

御列 御出之砌御取持之次第

御時分見合、御注進差遣候事

御出被成候ハ、御座江御挨拶之事

御多葉粉盆出

御煎茶出

御茶請出 御内原方出ル

美昼間出 上ノ御料理方

附 下り御せんニ而御供江出ル

大宜見御殿江御出立之時

御注進申来り候ハ、御靈前御燈明燈シ上ケ、檀那方御香被

差上、朝相御一同御拜被成候事

一 媒老入 一 さたりあむしたれ老入

一 大あかま老入 一 小あかま老入

一 桃灯持式人 一 安駄かけ式人

一 八人

一 祢引入 一 さたりあむしたれ老入

一 大あかま老入 一 小あかま三人

一 桃灯持式人

一 八人 大宜見御殿

酒盛之時

一 御時、前以大宜見御殿江御通知之事

一 午前八時相成候時、大こおり江さたりあむしたれ着座、亭

主御夫婦御出座、亭主方御趣意御達相成、濟而行列帳之通

如大宜見御殿出立候事

附

一 亭主御装束色衣着之事

一 御祝物御酒ニ双四合宛、御瓶黄赤染百田紙ニ而口取、耐か

い懸子ニ居し、黄染風呂敷ニ而包美辻おそひ候事

但、目録なし

一 行列人数朝飯兼而相仕廻させ、御時分前以致装束させ候事

一 右御式相濟罷帰候ハ、亭主御室大こおり江御着座、御返

御焼香相濟候ハ、御列并朝相大座江御着座

但、御装束

亭主着座

但、御装束

御多葉粉盆出

御盃立

御肴立 数之子

御吸物上 素めん

銚子出 扣居

御盃御列江上、亭主方御肴被御進、御盃亭主江被遣御肴被

御進、御盃御列江被御進、右次第二而御取替朝相二而納ル

御差味上 たい 猪口 白酢

御吸物下

御椀上 水い柚ひら

御差味下

御肴下

御菓子上 千餅三枚宛

御椀下

御煎茶上

御茶盆下

御多葉粉盆下

御出立之砌、亭主御挨拶

行列左之通

御列

色衣

瓶巢持壺双

御聳

色衣

瓶巢持式双

夜入候ハ、本門焼灯壺対懸候事

御嫁迎之時次第

午後七時成候ハ、御婚礼方方時分御案内、亭主并御室大こ

おうり江御着座、媒召寄亭主方御趣意被御達、如大目見御

殿出立候事

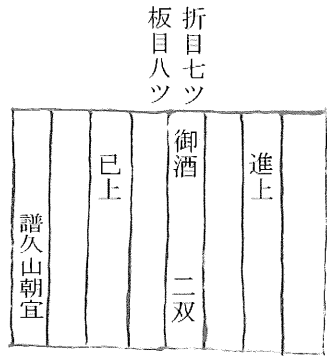
附

行列人数兼而装束させ、行列帳之通立備候、尤御料理前以
相仕廻させ候事

大こおり軒江焼灯壺対懸向、中門外左右江篝台居し明松燈
させ、外二用意二而番人相付候事

包酒之儀、酒盛之時同様之仕出にて、目錄者酒一同二耐か
い懸子二入、媒持参之御酒代者御酒代箱二入、唐丸盆二請、
黄染風呂敷二而包美辻おそひ、あむしたれ江相渡候事

一 同時目録、左之通



黄赤染杓原紙堅紙ニ書認候事



包紙之仕様 包紙黄赤染杓原紙

御嫁入之時次第

一 御時迎之儀於大巨見御殿時分相成候ハ、焼灯持ニ而無間違相勤候様申付置候事

附、時分相成候ハ、御内原御案内を以御迎差遣、御時相成候段相達、首尾申上候也

一 時分見合、大庫理御縁ニ御歳直耆人、^{式人} 礼服ニ而伺公

一 あむしたれ式人、手燭持右同断

一 大庫理御座敷饗之御花・御酒、御次はいし候事

一 切足本せんニ美辻敷、勝手表江備置候事

一 御座敷御饗之御花・御酒并御引出物、御用意候事

一 御祝物^盆おかけ合せ、美辻おそひ兼而御饗仕候事

一 御座敷饗并御花・御酒員数、御祝盆、左之通

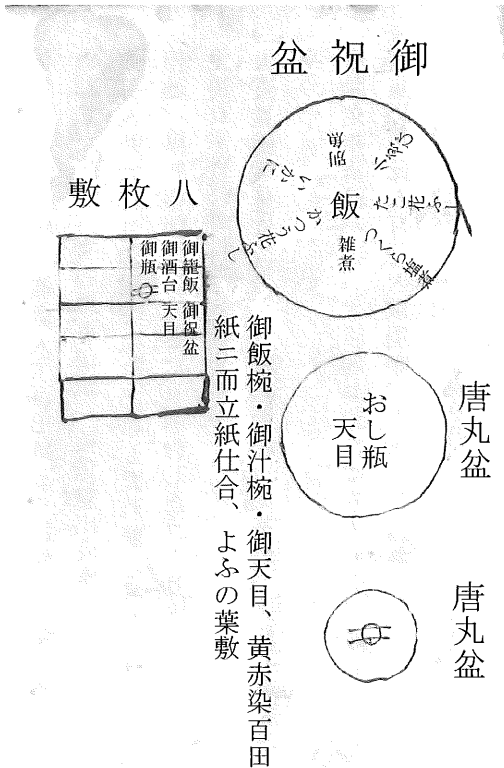
一 御籠飯壹通台共 上白米九合、黄赤染杓原紙ニ而内敷候事

一 鶴瓶壹双台共 酒四合、同紙ニ而門さし

一 御酒台 壹通 金之耳付盃并銀之流台共、同紙ニ而内敷候事

御祝盆、左之通

一 箸山米木ニ而式手作調、長耆尺二寸、黄赤染百田紙ニ而包、天目ふたニ而おそひ、丸盆ニ請候事



一 御嫁入之時、向中門御通階涯ニ而安駄御通り、御入被成候ハ、御歳直男一人縁類ニ而一礼、あむしたれ兩人手燭持土番御座迄御先ニ通、御座定り候ハ、朝相同席着座、御嫁持參之朝衣由朝衣令せ候而御歳直之女性衆ニ而差上、御酌取罷出、御饗之御盃台共御前江居し、御歳直ニ而御酒次御夫婦江上、御盃本之通直し、左候而御水撫上ケ、濟而子輕之御盆御宮仕之女性ニ而朝相御前江居し、御歳直ニ而ふた惣様迎し、三箸宛上ケ候而御退座、則チ御嫁江上、御相伴御出御寄合上候事

一 附、安駄居所ニ御縁涯迄兼てあだん葉薙敷令せ候也

一 御嫁持參之包酒并祢引人持參之御酒代者、伺公之男ニ而請取、大庫理江置候事

一 附、御嫁持參之等者翌日御酌有之候付、其心得を以備置候事

一 御嫁御入被成候ハ、大宜見御殿ヲ焼灯壹対大庫理軒江懸候事

一 大宜見御殿方之行列人数取持之次第

一 行列人数者大庫理江御挨拶、祢引人者媒相伴、さたりあむしたれ以下小あかま者此方さたりあむしたれ相伴ニ而左之通致馳走候事

一 多葉粉盆出 船形萆盆四ツ、きせる入付、萆入付

一 菓子出 千餅

一 煎茶出

一 茶請出

一 (盆) 本出

一 菓子下次第、媒・祢引人者百田紙ニ而包候而相渡、さたりあむしたれ以下者包用百田紙一枚宛差出候事

一 祢引人并大宜見御殿さたりあむしたれ膳之残り者彼之方江相進、媒并相伴相勤候さたりあむしたれ下り膳も差進候、尤道具者各銘書札押シ相届候事

一 大宜見御殿焼灯持者、大庫理御縁ニ而茶菓子并膳致馳走候事

一 右馳走相濟候ハ、大庫理ニおひて亭主并御室御着座、此時媒以下此方行列人数退座、小あかま迄あむしたれ宮仕ニ而、祢引人持參之御酒代同人前江置候ハ、同人方亭主并御室江進上ケ、引次御座敷饗之御酒ニ而亭主方祢引人以下小あかま迄一篇宛被下、引出物も則チ被下候、尤焼灯持并行列ニ携候男人数者、御縁ニ而同断被下候事

一 附

一 祢引人者耳付御盃、余者湯酌盃ニ而被下候事

一 引出物者本膳ニ美辻敷上ニ請ケ候事

一 右旁相濟祢引人被罷帰候ハ、此方媒以下焼灯持迄亭主方御酌之次第、右同断

一 附、媒者耳付御盃、余者湯酌盃ニ而祢引人同様

一 翌日朝御式之次第

一 式番御座江御夫婦へり取庭江着座、御歳直罷出、御座敷餽

之御盃并唐丸盆共御兩所前江居し、御歳直二而御酒次候而

上ケ、引次御兩所江御水撫、濟而はづ之御飯朝前江居し、

一 三箸宛上り候而退座、則チ御嫁江上ケ、御相伴御出御寄合

上候事

附、はづ之御飯者夜前之色付御飯二而、七束椀ニおかけ、

ふたし、七かけ中皿ニおかけ、御溜水者猪口式ツニ

おかけ、白箸式手、本膳壺ツニ請、美辻おそひ候事

一 右御式相濟、亭主并御室・朝相御着座被成候得者、御嫁持

參之御酒、あむしたれ御宮仕二而御酌、御嫁方御銘々江被

差上、濟而御座敷餽之御酒二而亭主方御嫁江御酌、御引出

物被下、引次附添之あむしたれ江も右同断被下候事

附

一 御嫁江御引出物青銅壺反

一 あむしたれ江銅錢拾疋

一 亭主并朝相色衣着

一 亭主并朝相御客居表、御室御嫁勝手表御着座

一 御式相濟御靈前江御燈明上ケ、御嫁御焼香被成候事

御嫁初御呼之時御持參物、左之通

一 御茶之子壺籠 餅白米三升先、粒ニ六十二粒

但、朱塗小飯ニおかけ、黄赤染百田紙二枚合ニ而立廻、

同紙二而おそひ、唐丸盆二居し、黄染風呂敷二而包

美辻おそひ候事

一 夜入候ハ、大御座・大庫理江燈台并らんふ燈方之事

一 御帰之時分向中門外左右二篝台置、明松燈候事

同時行列左之通

朝衣	嫁	白朝小飯持
あむしたれ		あかま

〔史料2〕

辰三月十六日娘婚礼之時烈并聶取持之次第

注進差遣 (官カ) □仕人

遠目附置

御出之砌亭主玄喚二而御礼儀

書院江御着座

亭主御礼着座

薄茶上 平茶台

茶碗下

里之子并親類罷出御礼退座

相伴御礼着座

亭主退座

多葉粉盆上 船形

盃立

肴立

雑煮上

附、相伴江者盃居付

酌出 扣居

亭主出

盃列之衆江上、亭主方肴上、盃・肴亭主江被遣、盃列之衆

江上、右次第二而聶迄盃仕納ル
亭主二而納ル

附、相伴江者別銚子二而相通

肴下

亭主退座

差味上、雑煮下

附、是方盃居付

銚子上 扣居

塩煮上、差味下

銚子上 扣居

塩煮下 此時多葉粉盆直し

二番座江里之子二而御挨拶

列并聶御持参之瓶酒、女性方并亭主江順々被遣、濟而亭主

方座敷饒之酒列之衆江進、引出物宮仕持出進之、聶江も右

通二而相濟、亭主より書院江御挨拶

御八卷御取被成候様、亭主御挨拶

菓子上

薄茶上、菓子下

茶碗下

料理献立之通上 一 堅飯上

鉢上 扣居

通上 扣居

御膳半御挨拶 亭主

手引下

湯上

菓子上、本膳下

- 薄茶上
- 茶碗下
- 菓子下
- 煎茶間之吸物、時宜見合上
- 取肴立
- 銚子上 扣居巢焼
- 相伴并親類罷出、御盃仕
- 吸物下
- 肴下
- 茶盆下
- 御八巻被成候様、里之子ニ而御挨拶
- 後段上
- 引汁上 湯次
- 通上
- 薄茶上、後段下
- 茶碗下 此時多葉粉盆直
- 多葉粉盆下
- 御立之砌御礼儀、最前之通
- 已上

KANNA Keiko, ISHIHARA Sayaka, ONO Masako and TAGUCHI Megumi:
 Elucidation and Modern Typesetting of the *Kamidake Morio*:
 papers relating to marriage



「り歸」嫁 花



「き行」嫁 花



婿 花

『南島研究』(1928年7月 南島研究会) 口絵より